

# 高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ —青年期後期～成人期の当事者に対する インタビューに基づく分析—

竹内 謙彰\*

高機能自閉症スペクトラム障害 (HF-ASD) 者の特別なニーズを明らかにするため、「自己の HF-ASD としての特性に理解のある青年期後期～成人期の当事者」7名を調査対象者として半構造化面接を行い、得られた語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) によって質的に分析した。その結果、36の概念が得られ、それらを集約する「理解してほしいという要望」、「学校にかかわる困難とニーズ」、「就労にかかわる困難とニーズ」、「生活にかかわる困難とニーズ」と命名された4つのカテゴリーが見出された。このうち、「理解してほしいという要望」が、他の3つのカテゴリーと相互作用する最も基本的なニーズであると考察された。この基本的なニーズは、当事者の母親に対するインタビューで見いだされたニーズとも共通するものであることが示唆された。あわせて、本研究の制約と今後の課題についても検討がなされた。

キーワード：当事者、高機能自閉症スペクトラム障害、インタビュー、特別なニーズ、質的分析

## 1. 問題

### 注目を集める大人の発達障害

今日、大人の発達障害に対する社会の関心が高まってきていると言ってよい。2005年に発達障害者支援法が施行されて、それまでは福祉施策の対象とはなにくかった高機能の (すなわち知的障害のない) 発達障害児・者も社会福祉法制度の中によろやく位置づけられるようになったことや、学校教育においても特殊教育から特別支援教育への転換がはかられ、2006年の学校教育法の改正により今まで支援の対象とされ

なかった LD, ADHD, 高機能自閉症等が支援の対象に含まれるようになったことが大きなきっかけとなっているだろう。現在、義務教育段階で新たに特別支援教育の対象となった子どもたちが、順次、成人を迎え始める時期に来ている。そうした人たちのニーズ<sup>1)</sup>をとらえ適切な支援を構築していくことは急務であると言ってよいだろう。

もちろん、社会福祉や学校教育において高機能の発達障害児・者を対象とする制度的整備がなされる以前から、乳幼児健診などを通じて、知的な障害とは認められないものの発達上の困難を抱える子どもたちが見出され療育の機会を得るなど何らかのフォローをされてきた人たちの中に、高機能発達障害に該当する人たちが含

\* 立命館大学産業社会学部教授

まれていた。彼ら彼女らは、感覚過敏や対人関係上の問題、あるいは衝動性などを抱えていて、とりわけ進学や就職などの発達上の転機に様々な困難を顕在化させてきた<sup>2)</sup>。そうした人たちの中には、すでに成人期を迎えている人がたくさんいることも、大人の発達障害が近年注目を浴びている背景の一つとして指摘できるだろう。

さらにもう一つの背景をあげるとすれば、発達障害が社会的に注目されるようになったことで、周囲の人とのかかわりや社会生活などでの困難を抱えていた人たちの中で、大人になってから、発達障害（特にアスペルガー症候群などの自閉症スペクトラム障害）の診断を受ける人が増えてきたことがあるだろう（杉山，2011）。

### 高機能自閉症スペクトラム障害当事者の特別なニーズ

本研究では、高機能発達障害の中でも、社会性の困難を抱えるがゆえに成人期における自立の課題に困難を生じやすい高機能自閉症スペクトラム障害<sup>3)</sup>（High Functioning-Autism Spectrum Disorders; 以下、HF-ASD と略記する）に焦点を当てる。

HF-ASD 者の抱える特別なニーズを理解するうえで、当事者の書いた自伝的文書（藤家，2005; Grandin, 2006; 2008; Grandin & Scariano, 1986; 小道, 2009; 森口, 2004; 村上, 2012; Shore, 2003）は多くの示唆を含んでいると言ってよいだろう。これらの著作からは、感覚の特異性の問題や、いじめの被害体験など対人関係でのネガティブな経験を受けやすいこと、家族を中心とした当事者を支える人の存在の意義、本人の持つ才能を伸ばすための取り組みの重要性などが読み取れる。

ただし、こうした自伝的文書からは、共通性ととともに、個々の当事者が抱える困難が非常に多様であることもまた示唆される。実際、当事者の母親を対象として特別なニーズに関するインタビューを行った筆者による調査では、同じく自閉症スペクトラムの範疇に入るとしても、抱える特性や直面する困難は人によって異なっており、多様性があることを前提にした障害の理解を求める声が重要性をもつカテゴリーとして見出されている（竹内，2012b）。こうしたことを踏まえると、HF-ASD 者のニーズを明らかにするうえで、共通性ととともに多様性を取り出すことが重要であると言えるだろう。

上述のように、すでに筆者は HF-ASD をもつ青年・成人の母親を対象としたインタビューに基づく調査研究行っているが、当事者の特別なニーズを明らかにするためには、やはり当事者自身の声を聴くことが求められるだろう。少なくとも、当事者の近親者の声と当事者自身の声を重ねることで、より立体的に特別なニーズが理解されるのではないかと期待される。

なお付け加えれば、HF-ASD 者の中でも自伝的文書をまとめられる人は限られているという問題もある。「高機能（High-Functioning）」という語は、単に知的障害がないことを意味しているだけであって、通常以上に知能が高いことを意味してはいない。それゆえ、理解力や語彙の知識や運用の能力などは、同じく HF-ASD 者といえども千差万別である。さらに言えば、定型発達者においても、あるまとまった文章を本や論文にまとめて公表・出版できる人は、全体の中のほんの一握りである。それゆえ、当然のことではあるが、出版された当事者の自伝的文書は、当事者の特別なニーズを理解するうえで参考にはなるものの、文書で表現することが必

ずしも得意ではない人のニーズを十分適切に代弁しているとは限らないのである。その意味でも当事者から直接話を聞くことには意義があると言ってよいであろう。

## 本研究の目的

青年期後期から成人期にあたる年齢の高機能自閉症スペクトラム障害（以下、HF-ASD）のある者に対して、発達の各時期に沿ったニーズについてのインタビューに対する質的分析をもとに、当事者が抱える特別なニーズの諸相を明らかにすることが本研究の目的である。

## 2. 方法

### 調査協力者

インタビューの対象となった調査協力者は、青年期から成人期にある HF-ASD 者 7 名であった。調査協力者の募集は、知人を通じて、ならびに地域の自閉症協会を通じて行った。年齢は 20 代前半から 30 代後半までであり、性別の内訳は、女性 3 名、男性 4 名であった。インタビュー対象者の属性を Table 1 に示した。

なお、今回調査に協力してくれた各当事者の母親に対しても、特別なニーズにかかわるイン

タビューによる調査を実施しており、その分析結果に関しては、すでに論文（竹内、2012b）として公表されていることを付記しておく。

### インタビュー・データの収集

インタビューは筆者が務めた。インタビューは半構造化面接の形式で行った。インタビューに要した時間は、1 時間から 2 時間程度であった。インタビュー時における発話は、調査協力者の同意を得て IC レコーダーにより録音した。また、補助的に筆記による記録も行った。

主な質問項目は、①学校での経験、②現在の状態、③将来、④希望すること、の 4 点であった。

なお、7 名の調査協力者のうち 3 名については、母親も同席してのインタビューとなった。これは、その当時、同時並行で進めていた HF-ASD 当事者の母親を対象とするインタビュー研究（竹内、2012b）の調査協力者として、インタビューに参加したものであった。発話の逐語記録を見返すことで、母親が同席していた場合も、当事者である調査協力者の発話部分が十分な量と内容的豊富さを持っていることが確認できたので、分析対象とすることができると判断した。

録音された発話を書き起こした逐語記録が本研究の主たる分析対象となった。分析にあたっては適宜インタビュー時の筆記記録も参照した。

### 倫理的配慮

調査協力者を募るに際しては、調査開始の前に研究の趣旨と方法を伝達し、協力してもかまわないという意味表示があった人を対象とした。インタビューの当日に、あらためて口頭と

Table 1 インタビュー対象者の属性

対象者	年齢	性別	現状	概念数
A	30代前半	女性	障害者枠就労	12
B	20代前半	女性	障害者枠就労	10
C	20代後半	男性	障害者枠就労	3
D	10代後半	男性	大学生	3
E	20代前半	男性	就労準備中	4
F	20代前半	男性	就職活動中	6
G	30代後半	女性	一般就労	9

インタビュー実施期間 2010年12月～2011年10月。

文書によって研究の趣旨を説明するとともに、いつでも申し出ることによって協力をやめることができること、および、そのことで不利益を受けないことを伝えるとともに、プライバシーの保護に関する説明を行い、書面による同意を得た。なお、インタビューを実施する以前に、立命館大学の研究倫理審査委員会で倫理的配慮の内容に関する審査を受けて承認を得た。

### 分析方法

本研究では、分析の方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAと記す）（木下，2003; 2007）を採用した。M-GTAは、質的データの分析方法の中でも、逐語記録のようなディテールの豊富なデータを活かす分析方法であること、ならびに、分析の手順が明確で具体的であることから、本研究の分析方法として採用した。すなわち、本研究のような詳細な発話分析をめざしている場合に適切な方法であると判断したのである。また、もともグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）は、ヒューマン・サービスの領域で発展してきたものであり、本研究のように適切な支援を志向するという問題意識を持つ研究には適合的であることも、M-GTAを分析方法として採用した理由である。

### 分析の手順と手続き

分析の大まかな手順は以下のとおりであった。まず逐語記録のなかから分析テーマと関連して重要と考えられる部分を見出し、それに基づいて概念を生成する。そうして得られた概念と関わる具体例が発話の逐語記録の他の部分中にもあるかどうかを確認する作業と、新たな概念を生成する作業を同時並行で進めつつ、さら

に、複数の概念間の関係をまとめてカテゴリーを生成し、また、概念間あるいはカテゴリー間の関係についての整理作業も行う。最終的には、生成された概念間やカテゴリー間の関係をまとめた結果図を作成するとともに、分析結果の文章化（ストーリーラインの作成）を行う。

具体的な分析の手続きは以下のとおりであった。M-GTAでは、データを解釈するにあたって、その観点を定めるために分析テーマの設定が重視される。本研究では、分析テーマを「HF-ASDのある青年期後期～成人期の当事者が抱える特別なニーズの発達の観点からの解明」とした。本研究は、「発達障害当事者とその家族における発達支援ニーズに関する語りの発達心理学的研究」をテーマとする包括的な研究の一部として実施されており、当事者の母親へのインタビュー研究も並行して同時期に行っている。しかし、同じく特別なニーズといっても、実際にインタビューを進め、また逐語記録を読み返すことで、当事者の語りと母親の語りでは、語られる内容もそこに示されるニーズも異なっていることが明確になった。そのため、両者を分けて分析することとし、対象者（分析焦点者）に沿った形で分析テーマが設定されたのである。なお、分析焦点者は、分析テーマに述べられているように、当初は「HF-ASDのある青年期後期～成人期の当事者」としていた。しかし、分析を進める中で、「自己のHF-ASDとしての特性に理解のある青年期後期～成人期の当事者」として、一定の制約を加えることとした。なぜなら、調査に協力してくれた当事者は、実際のところ、自己のHF-ASDとしての特性をある程度まで理解しているがゆえに、この研究の意義を理解して協力してくれたのである。なお、M-GTAで言う分析対象者は、個々の

調査協力者を指すのではなく、データ分析ならびに結果が責任を負う範囲を条件づけるものとして限定される集団である。

なお、分析対象とする当事者の発達時期の設定に関しても、分析を開始するにあたって若干の検討を行った。分析対象とする特別なニーズの範囲を、時系列的に話を聞いたすべての時期を対象とすると、範囲が広がることで分析の焦点が絞りにくくなる弊害が出るおそれがあるが、他方で、現時点のニーズに限定してしまうと、包括的な研究テーマである発達の観点からの分析にそぐわなくなってしまう。そこで検討のため、逐語記録を慎重に読み進めたところ、小学校低学年以前の経験にかかわる語りはほとんど見られず、経験の年齢範囲がそれほど広くはないことが確認された。そこで、インタビューにおいて言及された経験の年齢範囲すべてを分析の対象とすることとした。

実際の分析にあたっては、「手順」の所で述べたように、逐語記録を読み進めながら分析テーマに関連すると思われる部分を取り上げて具体例とし、他に類似した具体例が存在する可能性も考慮しながら概念を生成した。作業としては、電子化された逐語記録の具体例該当部分を、別のワープロ・ファイルである分析ワークシートにコピーして、概念名や定義を記した。同一の対象者の他の部分やあるいは別の対象者で、先に生成した概念に相当する具体例を見出した場合には、先の分析ワークシートに加えるとともに、新たに概念を生成する場合には、別の分析ワークシートを作成した。なお、概念を生成するにあたっては、「分析テーマ」を考慮するだけではなく、データに着目する際の判断の基準として、先述した「分析焦点者」も考慮した。

概念の完成度は、その概念に相当すると判断した具体例を相互につき合わせることで検討するとともに、定義と対照的な対極例がないかどうかを常に念頭に置き、概念生成の妥当性をチェックした。そうした分析の結果は、個々の分析ワークシートのメモ欄に記入した。

次いで、生成された概念相互の関係をそれぞれの概念ごとに検討した。概念を統合するカテゴリーを作成し、カテゴリー相互の関係に関する分析を行い、まとめた結果の概要を文章化（ストーリーラインの作成）するとともに、結果図を作成した。

#### 実際の分析プロセス

調査対象者7名のうち、語りの内容がもっとも豊富だと考えられた調査協力者Aを最初に分析し、12の概念を生成した。以後、各調査協力者の逐語記録を、順次分析した。なお、Table 1で示した調査協力者の順序は、実際にインタビューを行った順序ではなく、分析を行った順序である。掲載の順序に特別な意味はなく、結果の整理の都合上、分析順とした。

概念を生成するにあたっては、対極例や類似例がないかをその都度検討するとともに、新たな具体例がないかもあわせて検討した。一度生成した概念であっても、他の具体例との類似性が高く、まとめることがよいと判断した場合には、新たな概念として一つにまとめたり、あるいは、一つ概念が他の概念を吸収するようにしてまとめたりするなどの操作を行った。こうした作業と並行して、複数の概念からなるカテゴリーを生成し、結果図の作成を念頭において概念ならびにカテゴリー間の関係の検討を進めた。

分析では、最後の7人目まで、すべての調査

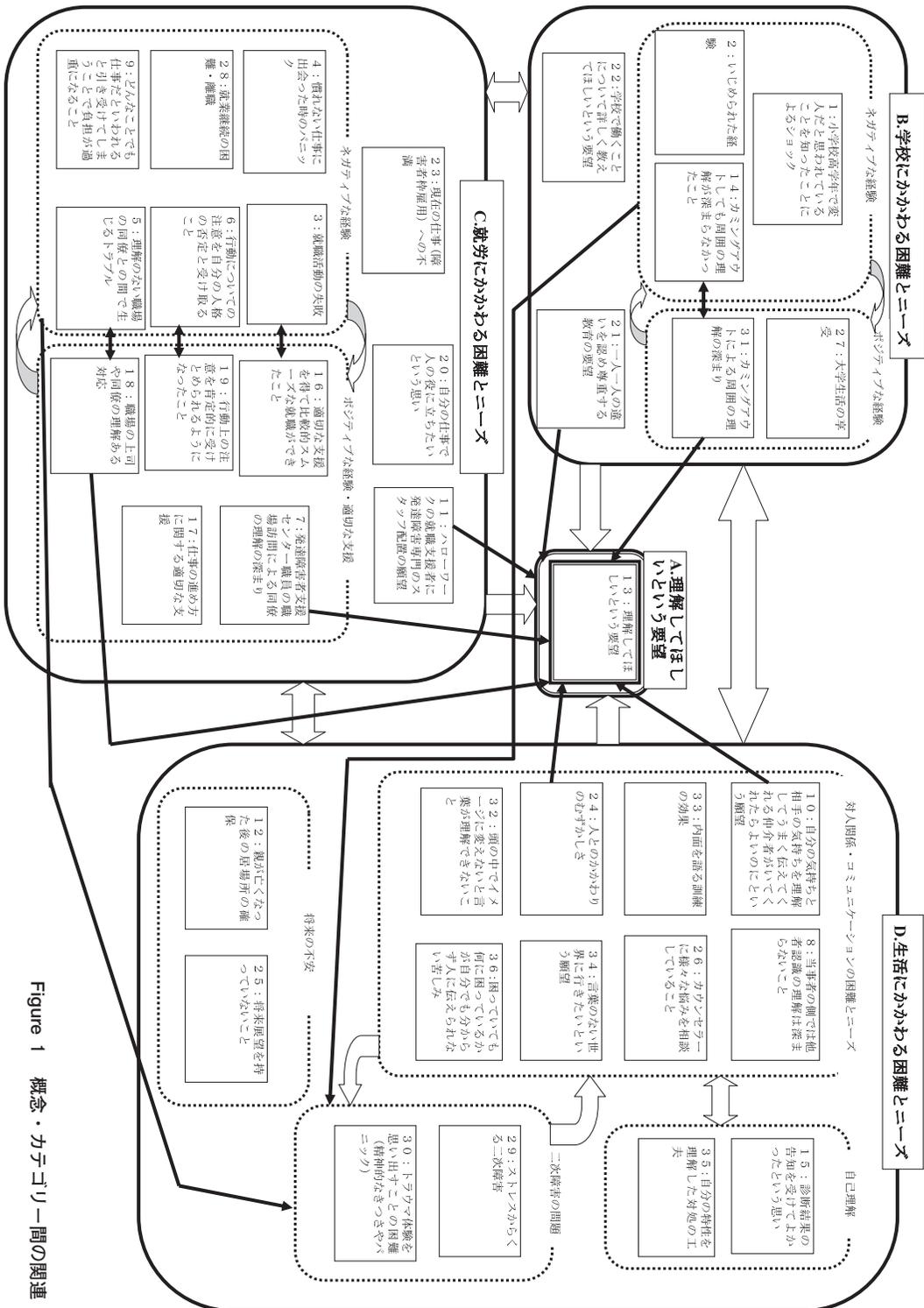


Figure 1 概念・カテゴリー間の関連

Table 2 各概念の定義と具体例

NO.	カテゴリ	概念名	定義	具体例
1	B	小学校高学年で変人だと思われていることを知ったことによるショック	小学校の高学年になって初めて自分が人と是不一样的と言われてショックを受けたこと	……その転校生の周りにクラスの男子が取り囲んで、そのうちの1人がうちを指して言ったんですね、何ていうか、あいつ変人やから近寄らん方がええでと言われて、そのときまで自分がそういうふうにも思われていたということ自体、全然知らなかったからショックでした。
2	B	いじめられた経験	からかひや陰口などによるいじめを受けた経験	(中学)3年になると、ちょっと2年に次いでちょっと、実をいうと2年に次いで所属していた学級が少し荒れ気味だったので、ちょっといじめに遭ったり、それから、おまえきもぞと言われたりしてすごく苦痛だったんです。
3	C	就職活動の失敗	就職活動で適切な振る舞い方ができずに失敗すること	エントリーだけだったらそれぐらい(100社ぐらい)の数だと思います。その中から、筆記なり最初の書類が通れば面接ということになるんですけども、筆記なり、あれが通っても面接で(落ちる)というパターンですね、ほとんどの場合ね。
4	C	慣れない仕事に出会った時のパニック	仕事の中で今まで経験したことのない課題に出会ったときにパニックになってしまうこと	何か、周りから見たらどうでもええことで怒ったりとかしてたらしんどんですけど、確かにそれはありますね、何ていうか、どう対応したら、今までの経験で当てはまらないことを言われて、どうしたらいいのか戸惑ったりとか。(中略)(ファックスの使い方を知らなかったの)それとわっとなったり、パニックになったりとか。
5	C	理解のない職場の同僚との間で生じるトラブル	当事者の困難についての理解がある程度あれば防げたかもしれない同僚とのトラブル	その先生がうちへコピーを頼んできたんですよ。私、コピーしてんですけど、たまたまそこが、そのひと(同僚)がいつも使ってるコピー機だって、何ていうか、その人が「何でこんなところでコピーしてんねん」と言われて、いや、こうこういうことと言ったら、何でそんなもんコピーする(本来やるべき業務でない)みたいな感じで。
6	C	行動についての注意を自分の人格の否定と受け取ること	行動に関する注意や指摘を受けたとき、相手の意図がどうであれ、自分の人格を否定しているように受け取ってしまうこと	私にとっては、行動も人格も全部一緒なんです、行動とか思考とか外見とか、それを全部含めて自分なんです。 (中略) だから一部を否定されただけでも、うちにとっては全部否定されたような感じなんです。
7	C	発達障害者支援センター職員の職場訪問による同僚の理解の深まり	発達障害者支援センター職員の職場訪問による説明などにより職場の同僚もHF-ASDの特性に対する理解を深めてくれるようになってくれたこと	そうですね、発達障害者支援センターの方の職場訪問とかが入ったりとかしてからは、同僚の方もアスペルガー症候群のことをちょっとは勉強してくれるようになって、それは助かってます。
8	D	当事者の側では他者認識の理解は深まらないこと	周囲の人は当事者に対する理解を深めてくれる場合があるにもかかわらず、当事者の側では他者認識を深めることができないこと	(「同僚の人も理解を深めてくれるところがあるのですね」の問いかけに対し) そうですね、けど、私には理解できないんですね、逆はないんですね。何ていうか、一般の人の考え方はどうなのかというのがわからないですよ、私には、経験でしか。それが何かそういう本が置いてあるでもなし、そういう本があったら少しは楽になるかもしれませんけど。
9	C	どんなことでも仕事だと言われると引き受けちゃうことで負担が過重になること	何がすべき仕事か、あるいは仕事の優先順位が判断できず、仕事だと言われたことはしなくてはいけませんと考えて負担が過重になってしまうこと	結局、ノーと言えないんですね、いろんなこと。それが、ある部分重宝される、けど自分ばぼろぼろになるという。
10	D	自分の気持ちと相手の気持ちを理解してうまく伝えてくれる仲介者がいてくれたらよいという願望	自分の気持ちと相手の気持ちを理解して他者に伝えるときにも他者の気持ちを理解してうまく自分に伝えてくれる役割を果たしてくれる人がいるとありがたいという願望	何ていうかね、自分だけけど、自分とは違う人格を持って、何ていうか、自分と他人の間みたいな存在がいたらいいのという思いはありますね、ずっと。(中略) 自分の気持ちを理解してくれて、なおかつ相手にそれを伝えて、逆に何か相手の気持ちというのを自分に分かりやすく伝えてくれる人。
11	C	ハローワークの就職支援者に発達障害専門のスタッフ配置の願望	発達障害者支援に関するノウハウを持っていて、なおかつ就職情報を適切に提示できるスタッフがいると、発達障害を持つ人が就職活動をする際にとっても役立つという思いがかる願望	アスペルガーとか、そういう軽度発達障害専門の就職支援のスタッフというのが、ハローワークとかにいたらいいかなという気はします。
12	D	親が亡くなった後の居場所の確保	グループホームやシェアハウスのように親の亡くなった後に当事者が暮らす場所を持ちたいとする要望	何かそういう発達障害者のグループホームというか、老人ホームみたいな規模がでかくなくていいんで、何か小さい個室とシェアハウスとか、グループホームとか、そういうことがあって、そこで一生死ぬまで、有意義に過ごせたらいいかなという気がするんですよ。何ていうか、親がいなくなると、契約が満了で、年齢でやめることになって、それから後の暮らしとか、そういうなんていうのかな、ついの住みか。
13	A	理解してほしいという要望	あれこれの対策や施策の前に、まず自分たちのことを理解してほしいという要望	だから自分が望むのは、今後またアスペルガー症候群というのが、そんな安易に取り上げられるほど簡単な障害ではないということ、人をわかってほしいということ、それを抜きにしてもやっぱりちょっと理解がもっと深まってほしいというのが、ちょっと何か望むべきことです。
14	B	カミングアウトしても周囲の理解が深まらなかったこと	障害のことをカミングアウトしたにもかかわらず周囲の理解が深まらなかったこと	そうですね。相も変わらず何か陰口は言われてましたけど。アスペルガー症候群やということ部活動の人たちにはカミングアウトしたんですけど、何かいまちそれがよく伝わったのかどうかというのはちょっとわからないかなという感じですね。お母さんも一緒に伝えて、それが同級生の子たちに理解できたかと思ったら、きっと無理やったんちゃうかなというの思うんですよ。まずだって、本人があんまりわかってへんに、ほかの人にわかれと言ったって絶対無理じゃないですか。
15	D	診断結果の告知を受けてよかったですという思い	診断結果の告知を受けたことが本人にとっての自己理解に寄与したこと	一応最初のうちはちょっと聞いて、すごい自分が今の今まで健常者だと思い込んでいたので、すごくショックだったんですけど、でも、今ではちょっとその事実もだいたい慣れたことができました。(中略)何だろう。自分の障害を、今になってありのままに受け入れられるのは、それは何かそれを受け入れられるのはすごくうれしいし、それにそれはそれで生きていけるんだと思って。
16	C	適切な支援を得て比較的スムーズな就職ができたこと	相談やジョブコーチなどを含めた丁寧で適切な就労支援を受けることができたおかげで比較的スムーズな就職に至ることができたこと	この求人どうやって言わはったから、ああ行きますって言って、同行面接みたいな感じで企業についてきてくださって面接したんですけど、そこで今のマネージャーの方で、その上司の方なんですけど、その型ともう一人の女性のマネージャーの方で、(中略)その時に私の得意なこととか不得意なこととか、ここは気を付けてくださいみたいなこととかを、そのジョブコーチの方も一緒にいらしてくださったんで言ってくださって、私は、「例えば三つ以上のことをいっぺんに言うとか、それ以上言うたら怒られますよ」とかね。(中略)3か月トライアル雇用で、とりあえず仕事と事を見てもらって、どこで合うかというのを考えてもらった上で本採用という形にしましょうということ、とりあえずトライアル雇用で雇ってもらって、3か月終わったころに本採用していたらいい、今に至るという感じなんです。
17	C	仕事の進め方に関する適切な支援	仕事を始めるに際して仕事の進め方に関する適切な支援を受けられたことで、仕事をスムーズに始めることができたこと	初日と2日目はジョブコーチがつきっきりで就業時間までついてくださったんで、すごい助かりましたし、あと作業カードって順序のやり方をラミネートみたいなしたのをリングでめくるとのを作ってくださいだったので、あれはすごい見やすいし助かってます。

Table 2 各概念の定義と具体例 (前ページよりの続き)

NO.	カテゴリ	概念名	定義	具体例
18	C	職場の上司や同僚の理解ある対応	職場の上司や同僚が特性をよく理解して適切な対応をしてくれることにより仕事がやりやすくなっていること	困ったことあったらいいやって言われるのと、わからへんかったら何回でも聞いたらいいしと言われるんで、何回でも聞いてます。勝手に進められてミスされる方が困るからって言われるんです。
19	C	行動上の注意を肯定的に受け止められるようになったこと	注意は非難ではなく自分のことを思ってくることだと説明されたことで他者からの注意を肯定的に受けとめることができるようになったこと	前に言われてうれしかったのが、今はおやめになられた方なんですけど、こうやってみんなが注意するのはな、みんなあなたと一緒にずっと働きたいと思ってるからやどって言われたときにはうれしかったですね。ああ、そう思ってくれてるねんかと思ったら、多少のことも「はい」と言って聞けるんで。そうなるとうれしいかなと思います。
20	C	自分の仕事で人の役に立ちたいという思い	自分が仕事をすることで人の役に立つことができれば幸せだという思いを抱くこと	自分が頑張って作ったものが現場に届いて、お客様の幸せにちょっとでも関わってたら幸せかなというのはいと思いますね。
21	B	一人一人の違いを認め尊重する教育の要望	障害の有無にかかわらず一人一人の違いを認め尊重するような教育がなされることへの要望	だから、ちょっと変わってるけど、あの子はあの子の価値観があるんやぐらいつい大幅というところを認めてあげられるような教育の現場とか教育の仕方がいいのかなというのと、頭ばかり育てるんじゃなくて、その子の心を育ててあげられるのが教育なんちゃうかなというのはい思いますけど。
22	B	学校で働くことについて詳しく教えてほしいという要望	学校で、働くことについて、具体的にもっと詳しく教えてほしいという要望	(小学校の時の教育に関する要望として) もっと働く、職業に関することはもっと教えてほしいかったですね。(教えてほしかったのは) 仕事のことについてですね。
23	C	現在の仕事(障害者枠雇用)への不満	現在、障害者枠で雇用されている仕事に対して不満を感じていること	(仕事の中身について) 楽は楽ですが、今はもう単調なことばかりなんです。(中略)ですから、その一つに単なる作業員のままだではだめだということがあるのですがね。この年でしたら、本当は、四五百万円くらいもらってないといけないんですか。
24	D	人とかかわりのむずかしさ	人とかかわることが難しいという自覚を持っていること	(大学生生活は) 楽しく過ごしていますが、ちょっと人とかかわりが難しくなってきました。特に、もう男の人にはヤンキーが多い感じですよ。やっぱり僕、女子よりも男子の方がかかわりが難しくなってると思いました。
25	D	将来展望を持っていないこと	将来の展望(希望や予測)を持っていないこと	(大学卒業後の将来について) 何も考えていません。
26	D	カウンセラーに様々な悩みを相談していること	カウンセラーに様々な悩みを相談していること	(毎週) ころの相談室へ行っています。そこで、勉強に関しての悩みを言ってます。いろいろ。(中略)とか、だから先ほどから言ってますように、タバコのことでもよく相談します。ほかにもヤンキーとか多くて、もう人とかかわり方はどうすればいいのかというのも言ってます。
27	B	大学生活の享受	大学での生活を楽しく過ごすこと	(大学生生活は) 楽しく過ごしていたかの質問に対して) はい。(大学の勉強にも) すぐに慣れました。(単位は) 少しは落としましたが、保険が、もしもの時に備えて多めにとった。
28	C	就業継続の困難・離職	就業継続が困難となり結果的に離職せざるを得なくなること	(就職して半年で) やめさせられた。(中略)しかも、探るか探らないか、かなり迷ったと言われて。(中略)会社の方から。
29	D	ストレスからくる二次障害	ストレスがかかることにより心身に様々な症状が現れること	最終的に、もうノイローゼ状態に陥ってたんだと思うんですけど、やっぱりチック症とかいうのも、中学の時再発してたと思うんですけど、小中学校のときはどつねるといふ形でたんですけど、あ、中学の時は強迫観念症ですね。扉を開けたときに、自分が納得した形で閉めないとか何か悪いことが起こるんじゃないかと思って不安になって。
30	D	トラウマ体験を思い出すことの困難(精神的なきつさやパニック)	トラウマ体験が想起されることで様々な心身の症状やパニックが起こってしまうこと	(フラッシュバックのような状態には) なります。そうすると、もう体も動かないし、ショック状態ですよ。
31	B	カミングアウトによる周囲の理解の深まり	カミングアウトすることで周囲の理解が深まったこと	(クラスの中で) 初めて自分がアスペルガー症候群だということを告白したんです。(中略)それ以降、ちょっとみんなも仲よくなったんです。ときどきちょっと自己申告行動に出ても、なにかそういってとちゅうかとちょっと突っ込まれたりしたんですけど、それでももう一度みんなとは仲よくなれたし、時々女子ともすぐ仲よくなれるようになったんです。今でも、実を言うと同窓会でもメンバーみんなとよく会って、もうすごい、あんたほどすごい一緒にいて深い思いを出してくれた生徒はいないわって、すごく褒めてくれるのですごいです。
32	D	頭の中でイメージに変えないと言葉が理解できないこと	言葉を理解しようとするとき、頭の中でイメージに変換する作業が伴わないと理解が困難であること	要は今でも同じなんですけれど、理解しようとする、と、やっぱりこうイメージに変えないと頭に入ってくないですね。言葉というの理解しようとする、映像化したりとか、自分の中でストーリー仕立てにして把握するようにならないと、ただ音だけが流れて一定しようという形で、ついていけないんですね。
33	D	内面を語る訓練の効果	心の中に生じていることを言葉にして語る訓練を繰り返したことによって、会話で人とコミュニケーションができるようになったこと	だから、今の状態、自分自身のことを語るのにトレーニングしたのが、その十何年間、摂食障害になってから、母がつきっきりで、どう感じるのかとか、なぜそうあなたは思ったのかというやり取りをずっと続けて、内面のことで今も、落ち着いて話せるようにはなりましたが、もっと10代のころとかは、言葉もわからないし、どう表現、表現するというのさえ、どう表現するのかわからないとか、単語も少ないですし、とりあえずわからないというのが私の言葉の、数少ない言葉の中で良く出てくる言葉だったりとか。
34	D	言葉のない世界に行きたいという願望	言葉を用いること自体にストレスがあるためできれば言葉のない世界に行きたいという願望	本当は今とかでも、どうしたいですかと聞かれたときに、質問の意図が本当は全然違うんですけど、私のずっといつも願望は、言葉のない世界に行きたいというのがいつも願望なんです。
35	D	自分の特性を理解した対処の工夫	自分の特性をある程度理解して何かあった時のために対処を工夫していること	(不快な色を見てパニックを起こしたりすることがあるが) そういう症状を全部一応、減ってきたんですけども、まあ、(中略)トレーニングですね、それこそ、それに、あとは自分でそれを分析して、理屈を理解するようになりました。その違和感とか不快と感じる、それに集中しすぎないようにとか。
36	D	困っていても何に困っているのが自分でもわからず人に伝えられない苦しみ	困っている自覚はあっても何に困っているかが自分で理解できずさらに助けを求めようにも人に伝えられずに苦しい思いをすること	一番本人の苦しみとしてあるのは、わからないと言ったときに、何がわからないのか自分もわからないから、説明もできないし、助けてと言えないんですね、助けてほしいんだけど、何を助けてほしいかと言われたら、わからないになってしまうので、助けてくれようとする姿勢のある者でさえ、何というのかな(離れざるを得なくなる)。自分がわからないことを言語化することもできない。何に困惑しているのか、自分が何に戸惑っているのかさえわからないので。

協力者において、新しい概念が生成された。7人目で新たに生成された概念数は5個であった。分析順の最後の対象者に至るまで新たな概念が生成されたことは、対象者を増やすことでさらに新たな概念が生成されうる可能性を示唆するものである。しかしながら、今回の調査協力者募集で調査を受け入れた対象者は7人だけであり、また、全員がその母親からもインタビューによる特別なニーズを聞き取っているという共通性も持っており、さらに別の対象者を加えることは、データの整合性を崩すことになるかと判断し、今回は、この7名の対象者に基づいて分析を終結する判断を行った。

分析の全体を通じて計42の概念を生成した。先述したように概念を統合したり削除したりすることにより、最終的に概念数は36となった。この36の概念にもとづき最終的な結果図ならびにストーリーラインの作成を行った。概念およびカテゴリ相互の関連を検討したうえで、抜け落ちている部分がないと判断して分析を終結した。

### 3. 結果と考察

36の概念に基づき4つのカテゴリを生成した。以下の本文中では、カテゴリを【 】で、概念を《 》で示すこととする。生成したカテゴリは、【A. 理解してほしいという要望】、【B. 学校にかかわる困難とニーズ】、【C. 就労にかかわる困難とニーズ】、【D. 生活にかかわる困難とニーズ】とそれぞれ名づけられた。それらのカテゴリ間の関連を結果図としてまとめたものが、Figure 1である。なお、図内の矢印は、概念やカテゴリの意味から推測される影響関係を示している。また、Figure 1で示した

概念に関して、含まれるカテゴリと定義ならびに具体例をTable 2に示した。

#### コア概念の生成

分析を進める中で、HF-ASDのある青年期後期～成人期の当事者にとって、学校でのクラスメートや友人・知人あるいは職場での同僚など当事者を取り巻く人々に理解してほしいということが、共通性を持った切実なニーズであることが明らかになってきた。たとえば、最初に分析の対象となったAさんは、希望することについて問われた際、「思いつく、そうですね、まず、政策もへったくれも、とにかく一番重要なのは理解してほしい。（中略）何というか、合わせてくれたら最高なんですけど、合わせてくれなくても、何というか、せめて理解してほしいという思いですよね」と述べた。またEさんも、同じ質問に対して、「だから自分が望むのは、今後またアスペルガー症候群というのが、そんな安易に取り上げるほど簡単な障害ではないということを、人々が知ってほしいということと、それを抜きにしてもやっぱりちょっと理解がもっと深まってほしいというのが、ちょっと何か望むべきことですね」と述べている。分析にあたっては、特に下線部に注目して、《13. 理解してほしいという要望》概念を生成した。この概念には、分析終結までに4人の分析対象者から5つの具体例が得られた。

この概念は、様々なニーズの基底に位置づくかなり基本的なものではないかと考えられる。特に、《5. 理解のない職場の同僚との間で生じるトラブル》、《7. 発達障害者支援センター職員の職場訪問による同僚の理解の深まり》、《10. 自分の気持ちと相手の気持ちを理解してうまく伝えてくれる仲介者がいてくれたらよい

のにという願望》、《11. ハローワークの就職支援者に発達障害専門のスタッフ配置の願望》、《14. カミングアウトしても周囲の理解が深まらなかったこと》、《18. 職場の上司や同僚の理解ある対応》、《21. 一人一人の違いを認め尊重する教育の要望》、《24. 人とのかかわりのむずかしさ》、《31. カミングアウトによる周囲の理解の深まり》といった概念は、含まれるカテゴリーはそれぞれ異なっているが、《13. 理解してほしいという要望》を基底として持っているという点で共通性があると言ってよいだろう。見方を変えれば、これらのニーズはすべて、《13. 理解してほしいという要望》というコア概念たるニーズを形成する要因と言ってもよいかもしれない。

#### 各カテゴリーにおけるプロセスとプロセス全体の動き

ここではまず各カテゴリー内のプロセスについて順次述べつつ、カテゴリー間の関連についてもその都度触れたのちに、全体のプロセスを外観したい（Figure 1 および Table 1 参照）。

#### 【B. 学校にかかわる困難とニーズ】

このカテゴリーに含まれる概念の多くは、ネガティブな経験にかかわるものとポジティブな経験にかかわるもののいずれかに分けることができる。ネガティブな経験にかかわる概念としては、《1. 小学校高学年で変人だと思われていることを知ったことによるショック》、《2. いじめられた経験》、《14. カミングアウトしても周囲の理解が深まらなかったこと》の三つがあげられる。それに対して、ポジティブな経験にかかわる概念としては、《27. 大学生活の享受》、《31. カミングアウトによる周囲の理解の

深まり》の二つがあげられる。

ポジティブな経験とネガティブな経験は対極的な関係にあるものだが、どちらの経験をするかは当人の振る舞い方だけで決まるものではなく、むしろ、周囲の人々との関係ならびに周囲の人々の振る舞い方により大きく左右されるものではないかと考えられる。それが特にはっきり表れるのが、自己の障害をカミングアウトした場合に、それがポジティブな経験となるのかネガティブな経験となるのかの違いである（概念14と31）。カミングアウトするという当事者の行為の性質は同じでも、周囲の生徒や教師がどれくらい理解をしようとし、どのような振る舞い方をするかで、経験の質が異なってくるのである。カミングアウトするという行為には、そもそも理解を求めるニーズである《13. 理解してほしいという要望》が含まれており、それがある程度かなえられたときには、ポジティブな経験となるが、何の変化ももたらされなかったり、より悪い状況が生まれたりすれば、ネガティブな経験へと転化するのである。

なお、ポジティブな経験やネガティブな経験には含まれないがこのカテゴリーに含まれる概念として、《21. 一人一人の違いを認め尊重する教育の要望》と《22. 学校で働くことについて詳しく教えてほしいという要望》の二つをあげることができる。どちらも、学校教育を振り返った時に、こうしたことがあったら良かったと考えられる点である。概念21は、教育の場における基本的なニーズである《13. 理解してほしいという要望》の具体化というべきものであろう。それに対して概念22は、現在、当事者が直面している就職や就労継続という課題から浮かび上がってきたニーズではないかと考えられる。

### 【C. 就労にかかわる困難とニーズ】

このカテゴリーにおいても、多くの概念がネガティブな経験にかかわるものかポジティブな経験にかかわるものに分けられた。なお、ポジティブな経験には、何らかの意味で適切な支援がかかわっているため、ポジティブな経験にかかわる概念をくくる名称として「ポジティブな経験・適切な支援」を用いた。裏を返せば、ネガティブな経験は、必ずしも意図的ないじめや妨害があったわけではないが、就労にかかわって適切な支援が欠けていたためにネガティブな経験となったものであると捉えることができるように思われる。とりわけ、3対の対極的な概念は、適切な支援の有無によって、経験がネガティブなものにもポジティブなものにもなりうることを示しているだろう。以下、それぞれの対極例を見ていこう。

一組目は、《3. 就職活動の失敗》対《16. 適切な支援を得て比較的スムーズな就職ができたこと》である。HF-ASDを抱える当事者の場合、就職の際につまずくことが多い。今回の調査協力者7名中3名の人が就職活動の失敗について語っている。そのうち二人は、面接の際に適切な受け答えができなかったことを、他の一人はインターンシップの際に勤務態度ではなく臨機応変な対応ができなかったことを、それぞれ失敗の要因として指摘している。言葉でのやり取りでその場に合った適切な受け答えをすることの困難や臨機応変にその場の状況に合わせた対応をとることの困難は、いずれもHF-ASDにしばしば見られる特性だと言ってよいだろう。そうした特性への一定の配慮が事前になされてジョブマッチングが行われていれば、状況はかなり異なったかもしれない。それに対して、今回、適切な支援を得て比較的スムーズな

就職ができた経験を語った調査対象者は1名であるが、その人の場合、障害者雇用として雇用する側もあらかじめ準備があり、ジョブコーチがついて仕事のコーチングがなされ、トライアル雇用期間が設けられるなど、適切な支援を得ることで、比較的スムーズな就職に至っており就労も継続している。HF-ASD当事者のすべての人に対して就職の際に支援が必要であるわけではないが、就職にかかわって困難が顕在化している場合や、あるいは予想される場合には、適切な支援を行うことが、就職を成功させるためにも、また就労を継続させるためにも、必要となつてこよう。

2組目は、《6. 行動についての注意を自分の人格の否定と受け取ること》対《19. 行動上の注意を肯定的に受け止められるようになったこと》である。行動に関して注意をされたとき、それを人格の否定と受け取ってしまうことは、定型発達者の場合でも時として起こりうることである。ただ、HF-ASDの特性を持っている人の中には、注意をした人の意図が読み取れず自分に対する非難だと受け止めてしまうことが多くなりうるだろう。さらに、以前からの対人関係における失敗やネガティブな経験の蓄積によって、そうした受け止めの傾向が強められている場合が多いのではないだろうか。それゆえ、仕事上の失敗に関する指摘やあるいはアドバイスを行う場合、HF-ASD者に対しては、とりわけ丁寧な説明が必要であろう。また、当事者と周りの人との間に信頼関係があるかどうかも重要な要素であろう。

3組目は、《5. 理解のない職場の同僚とのトラブル》対《18. 職場の上司や同僚の理解ある対応》である。これは、まさに職場の同僚や上司が、HF-ASDを持つ人の特性について理解

をしているかどうか、あるいは少なくとも理解しようとする姿勢があるかどうかで、当事者の経験がポジティブなものになるかネガティブなものになるかが変わってくる例であると言えるだろう。なお、この二つの概念は、先述したように、コア概念たる《13. 理解してほしいという要望》と結びついているものである。

こうした対極例以外にも、「ネガティブな経験」に含まれるものには、《4. 慣れない仕事に出会った時のパニック》、《28. 就職継続の困難・離職》ならびに《9. どんなことでも仕事だといわれると引き受けてしまうことで負担が過重になること》の三つの概念がある。概念4と9は、HF-ASDの特性にかかわって生じやすいことだと言えるだろう。それに対して、概念28は、必ずしもHF-ASD者の特性と直接つながりがあるとは言えない問題であろう。とはいえ、何らかの配慮や支援があれば、避けられた問題である可能性はある。

「ポジティブな経験・適切な支援」に含まれる対極例以外のものとしては、《7. 発達障害者支援センター職員の職場訪問による同僚の理解の深まり》と《仕事の進め方に関する適切な支援》の二つの概念をあげることができる。

なお、「ネガティブな経験」と「ポジティブな経験・適切な支援」のいずれにも含まれないが、このカテゴリーに属すと考えられる概念には、《11. ハローワークの就職支援者に発達障害専門のスタッフ配置の要望》、《20. 自分の仕事で人の役に立ちたいという思い》ならびに《23. 現在の仕事（障害者枠雇用）への不満》の三つがあげられる。概念11は発達障害者の就職支援の充実を求めるニーズであり、概念23は現在障害者枠雇用で就労しているものの、仕事の内容が単調で自分の能力にあっていないことや

収入が少ないことに対する不満であり、いずれも制度にかかわってのニーズだと言えるだろう。それに対して、概念23は仕事への意欲にかかわるものである。仕事で人の役に立ちたいという思い自体は、障害の有無にかかわらず、就職する際、また就労を継続していく際の重要な要因であると言ってよいが、そうした意欲を持つようにすることも支援にかかわる重要な要因であるように思われる。

#### 【D. 生活にかかわる困難とニーズ】

このカテゴリーは、4つの下位グループに分けて理解することができる。最も大きいグループが、「対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ」であり、これには、《10. 自分の気持ちと相手の気持ちを理解してうまく伝えてくれる仲介者がいてくれたらよいのという願望》、《8. 当事者の側では他者認識の理解は深まらないこと》、《33. 内面を語る訓練の効果》、《26. カウンセラーに様々な悩みを相談していること》、《24. 人のかかわりのむずかしさ》、《34. 言葉のない世界に行きたいという願望》、《32. 頭の中でイメージに変えないと言葉が理解できないこと》、《36. 困っていても何に困っているかが自分でもわからず人に伝えられない苦しみ》の8つの概念が含まれる。これらは、いずれもHF-ASDの特性とかかわって生じてくる困難とニーズであると言ってよい。ただし、対人関係やコミュニケーションにかかわって困難を感じるという点では、今回の調査協力者全員に共通性があるものの、その困難やニーズの現れは一人一人異なっていると言ってよく、また自己の抱える困難に対する理解の程度も異なっていると言えるだろう。

このカテゴリーに属する他の下位グループ

は、「自己理解」、「二次障害の問題」および「将来の不安」の三つである。

「自己理解」には、《15. 診断結果の告知を受けてよかったという思い》と《35. 自分の特性を理解した対処の工夫》が含まれる。診断の告知などを通じて自己理解を深め対処の工夫を行う「自己理解」は、「対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ」と相互作用する関係にあると考えられる。すなわち、そうした自己理解とそれに基づく対処の程度によって、対人関係やコミュニケーションにかかわる困難に対する理解やニーズも変化しうるとともに、困難やニーズの変化によって逆に自己理解に変化がもたらされることもありうるからである。

「二次障害の問題」には、《29. ストレスからくる二次障害》と《30. ト라우マ体験を思い出すことの困難（精神的なきつさやパニック）》の二つの概念が含まれる。この「二次障害の問題」も、「対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ」と相互作用する関係にあると考えられる。すなわち、対人関係やコミュニケーションに困難を抱えれば抱えるほどストレスが高まり二次障害的問題が生じやすくなるのであり、また逆に、そうした問題を抱えることで、安定した対人関係を構築し理解可能なコミュニケーションを行う可能性を持ちにくくなるからである。なお、「二次障害の問題」に対しては、【B. 学校にかかわる困難とニーズ】や【C. 就労にかかわる困難とニーズ】に含まれる「ネガティブな経験」が影響を与えていると考えられるだろう。

「将来の不安」には、《12. 親が亡くなった後の居場所の確保》と《25. 将来展望を持っていないこと》の二つの概念が含まれる。この「将来の不安」は、将来のことを考えた時に感じる

不安、あるいは、将来のことをそもそも考えられないという心理的状态を表していると考えられる。

#### プロセス全体の動き

ここまで、各カテゴリーにおいて想定されるプロセスを述べてきた。そこで部分的にはカテゴリー間の関係も述べているが、ここであらためて全体のプロセスを概観しておきたい。

【B. 学校にかかわる困難とニーズ】、【C. 就労にかかわる困難とニーズ】および【D. 生活にかかわる困難とニーズ】の三つのカテゴリーは、それぞれ相互作用しあう関係であると考えられる。

個人の経験する時間の流れで見れば、学校時代に経験した困難や感じたニーズは、就労における困難やニーズに影響を与えているだろう。他方で、現在就労している場合、就職活動や就労経験から学校にかかわるニーズに気づくという場合もあると考えられる。《22. 学校で働くことについて詳しく教えてほしいという要望》などはその一例であろう。

【D. 生活にかかわる困難とニーズ】は、学校時代から就労して以降まで、どの時期にも存在する困難とニーズであろう。これは、HF-ASDの特性とも関連が深いものであるだけに、【B. 学校にかかわる困難とニーズ】および【C. 就労にかかわる困難とニーズ】に影響を及ぼすとともに、学校での経験や就労にかかわる経験が、ポジティブなものであれネガティブなものであれ、生活の困難やニーズに影響を及ぼすことがあるだろうと考えられる。

さらに、【B. 学校にかかわる困難とニーズ】、【C. 就労にかかわる困難とニーズ】および【D. 生活にかかわる困難とニーズ】の三つ

の 카테고리の中に含まれるいくつかの概念が、直接、《13. 理解してほしいという要望》に影響していると、「コア概念の生成」の項で述べたが、これら三つのカテゴリーとしても、【A. 理解してほしいという要望】カテゴリーに影響している関係であろうと想定される。すなわち、今回のインタビュー研究において明らかとなった、中心的と言ってよいニーズは、「理解してほしいという要望」に集約的に表現されていると考えられるのである。

#### 4. 総合的考察

##### 本研究の調査協力者の特徴

今回のインタビューから浮かび上がったコア概念は《13. 理解してほしいという要望》であった。

「分析の手順と手続」の項で述べたように、本研究では分析焦点者を「自己の HF-ASD としての特性に理解のある青年期後期～成人期の当事者」と特徴づけたが、実際、自己の特性に一定の自覚のある人たちが、この研究の対象者として参加してくれたのである。すなわち、今回インタビューに協力してくれた当事者は、自己の抱える HF-ASD の特性についてある程度以上の自覚があり、また、大学生である一名を除いて、現在就労しているか、あるいは就職に向けて何らかの準備状態にある人たちである。対人関係やコミュニケーションに困難を抱えながらも、働くこととの関係で、人とかかわりに直面せざるを得ないことから、こうしたニーズが浮かび上がったと言ってよいだろう。

現実問題としては、職場においても、誰にどこまで自己の障害について開示をして理解を求めるべきかは、様々な要因を考慮せねばなら

ず、一概には決められない。障害者雇用枠での就労をめざすのか、一般就労かにもよるし、また、就職してからも、誰にどのように協力を求めるかは、状況次第であろう。支援者もこの点について慎重に検討することが求められるし、また、当事者も、可能であれば、自己権利擁護 (Hane et al., 2004) のすべを身に着けていくことが求められると言えるだろう。

##### 母親に対するニーズ・インタビュー結果との比較

「2. 方法」の「調査協力者」の項でも述べたように、青年期後期～成人期の HF-ASD のある当事者の母親に対して特別なニーズにかかわるインタビューによる調査を実施して、その分析結果はすでに論文 (竹内, 2012b) として公表されている。今回のインタビュー研究は、その母親の子どもたちのうち、調査への協力が得られた人たちを対象としている。そこで、インタビューから浮かび上がったニーズの諸相を、簡単に比較検討しておきたい<sup>4)</sup>。

まず、共通点としてあげられるのは、理解を求める要望が、重要なニーズとして浮かび上がった点である。本研究では、《13. 理解してほしいという要望》がコア概念として位置づけられたし、母親インタビュー研究においても、コア概念ではないものの、「多様性を含めた ASD の特性理解の要望」という概念が単独で同名のカテゴリーを構成しており、他のすべてのカテゴリーに影響を及ぼすプロセスが想定されていた。適切な配慮や支援を得るためには、何よりも周囲の（さらには社会の）理解が重要であるとの認識は、HF-ASD 者の母親と特性に自覚を持つ当事者自身の両者に共有されるものであろうと考えられる。

また、学校にかかわるニーズ、生活にかかわるニーズ、就労にかかわるニーズの3点は、それぞれ詳細に違いがありカテゴリー等の名称には若干違いがあるものの、大まかには共通したものが見出されたと言ってよいだろう。

他方、主たる違いとしては、二つの点が指摘できる。すなわち、母親にのみ、「早期発見・早期対応の要求」というカテゴリー、ならびに「当事者が自立した生活を送るためのシステム」というサブカテゴリーが見出されていることである。前者、すなわち「早期発見・早期対応の要求」は、母親にとっては子どもの障害と格闘する最初の経験にかかわるニーズであり、重要な位置づけを持つものと言えるが、当事者にとっては、早期発見や早期対応としての療育などは経験していても想起できる記憶ではないため、自己のニーズとしては語られることがなかったのだと考えられる。では、後者である「当事者が自立した生活を送るためのシステム」のニーズについて、ある程度まとまった概念やサブカテゴリーが形成される語りが母親には見られたのに対して、当事者にはなかったのはなぜであろうか。母親にとっては、自分たち親が子どもへの配慮や支援を行うことができなくなる将来のことが切実な問題として把握されるために、こうした自立の課題が語られるのに対して、当事者にとっての当面する切実な問題は、日々の生活の困難や就労の課題との格闘であるのだろう。将来の不安については語られることがあっても、それが自立の課題として認識されるまでには十分まとまっていないのかもしれない。

今回見出されたような母親と子どもにおける自立にかかわる認識の違いは、定型発達者とその母親の関係においてもみられるのかどうかは

わからない。今後検討すべき課題の一つと言えるかもしれない。

### 本研究の制約と今後の課題

青年期後期～成人期の HF-ASD 当事者が抱える特別なニーズの諸相を、当事者へのインタビューを通じて明らかにすることが本研究の目的であり、それに対して一定の成果が得られたと言ってよい。他方で、得られた結果に関して一定の制約があることも記しておかなくてはならない。

まず、調査協力者が7名と少なかったことが制約の一つとしてあげられる<sup>5)</sup>。一人一人の語りから概念を生成する分析を進めたところ最後の一人に至るまで新たな概念が生成され続けたことから、多様なニーズを十分網羅できたとは必ずしも言えないのである。さらに別の当事者にインタビューを行うことで、新たな概念や、さらには、新たな概念によって構成される新たなカテゴリーすらも、見出される可能性がある。ただし、対象者を増やすことで概念が豊富化することは十分ありうるものの、現時点でもカテゴリーとしてのまとまりは比較的わかりやすいものであり、全く新しいカテゴリーが見出される可能性は必ずしも高いとは言えないように思われるのではあるが。

もう一つの制約は、今回の調査協力者が「自己の HF-ASD としての特性に理解のある青年期後期～成人期の当事者」だったことである。自己の特性に理解のある当事者であるからこそ、研究の意義を理解して協力してくれたのであり、また、自分が経験したり認識したりしてきた様々な困難やニーズを語ってくれたのである。にもかかわらず、これを制約というのは、自己の特性への理解を持たない HF-ASD 当事者

への配慮や支援が、今日、学校現場においても一般社会においても重要な課題となってきたからである。自己の特性への理解がない「当事者」としては、例えば診断がなされていても本人には告知されていないような場合から、特性があることが推測されるものの本人や保護者には自覚がなく診断や指摘を受けていない場合まで、様々な例が想定されよう。しかしいずれにせよ、自己の特性に理解がない場合には、本人に対し特別なニーズに関して直接質問するというインタビューを行うこと自体が成り立たないだろう。アプローチの方法を工夫しなくてはならない。

さて、最後に今後の課題について述べて、本研究の結びとしたい。

先述した制約は、今後の課題にもつながるものである。すなわち、調査協力が少なかったという制約からは、さらに調査協力を増やした研究を行うことが求められるだろう。

自己の特性への理解がない「当事者」を対象として特別なニーズを探ることも、今後の課題の一つである。ただし、この場合は、研究方法の工夫を含めて今後の課題としなければならない。

なお、今回の研究と前回の研究の比較から、当事者とその母親では、ニーズの諸相に共通点とともに若干の違いが見られ、特に自立にかかわるニーズに関して違いがあることが明らかになった。こうした違いが、定型発達の青年～成人とその母親の関係においても見いだされるのかどうか、検討すべき今後の課題としておきたい。

## 注

- 1) 従来のニーズ論では、解決を必要とするとい

うことが社会的に認められた要援護状態を狭義のニーズ、ある種の状態が一定の目標なり基準から見て乖離の状態にある依存状態を広義のニーズととらえる見方がある（三浦，1985）。本研究では、前著論文（竹内，2012b）と同様、適切な支援を構想する手がかりを得ることをめざしているため、調査対象者にとっても明確な要求として意識化されるまでには至っていない乖離の状態を含めて、できるだけ広義の意味でニーズの語を用いることとした。

- 2) 例えば1972年に生まれた村上（2012）は、幼児期に、ある医師から「自閉症ではないか」と指摘されて療育を受けた経験を記している。
- 3) 高機能自閉症スペクトラム障害（HF-ASD）の語の内、「高機能」は、知的障害が無いことを意味している。また、自閉症スペクトラム障害は、本稿執筆の段階では正式な診断名ではなく、アメリカ精神医学会作成のDSM-IVで規定された広汎性発達障害とはほぼ同じ意味で使われている。自閉症スペクトラム障害（広汎性発達障害）は、主として社会性とコミュニケーションの障害および想像力の欠如によって特徴づけられる障害であるが、障害特性の現れ方は個人ごとに非常に多様である。
- 4) ただし、各母親のすべての子どもから協力が得られたわけではない。前回研究の協力者の母親は12名であるのに対して、本研究の協力者は7名であった。それゆえ、大まかな傾向の比較を行うのにとどまることを付記しておきたい。
- 5) 少ない対象者でも研究をまとめた理由は以下のとおりである。すなわち、今回の調査協力が、すでに協力を得た母親の子どもたちの中で協力してくれた人たちを対象としていたので、集団としては一つのまとまりをなしていると考え、研究として区切りをつけたのである。

## 引用文献

- 藤家寛子（2005）『あの扉のむこうへ：「自閉の少女と家族、成長の物語」』花風社
- Grandin, T. (2006). Stopping the constant stress: A personal account. In Baron, M. G., Groden, J., and Lipsitt, L. P. *Stress and coping in autism*.

- Oxford University Press. Pp.71-81.
- Grandin, T. (2008). *The way I see it: A personal look at autism and Asperger's*. Future Horizons.  
(中尾ゆかり (訳) (2010) 『自閉症感覚：隠れた能力を引きだす方法』 日本放送出版協会)
- Grandin, T., and Scariano, M. S. (1986). *Emergence: Labeled autistic*. Arena press. (カニングハム久子 (訳) (1993) 『我, 自閉症に生まれて』 学習研究社)
- Hane, R. E. J., Sibley, K., Stephen M. Shore, S. M., Roger Meyer, R., & Phil Schwarz, P. (2004). *Ask and tell: Self-advocacy and disclosure for people on the autism spectrum*. Autism Asperger Pub Co. (荒木穂積 (監訳)・森由美子 (訳) (2007). 『自閉症スペクトラム生き方ガイド：自己権利擁護と障害表明のすすめ』 クリエイツかもがわ)
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』 弘文堂
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂
- 三浦文夫 (1985) 『社会福祉政策研究：社会福祉経営論ノート』 全国社会福祉協議会
- 森口奈緒美 (2004) 『変光星—自閉の少女に見えていた世界』 花風社
- 村上由美 (2012) 『アスペルガーの館』 講談社
- Shore, S. (2003). *Beyond the Wall: Personal Experiences with Autism and Asperger Syndrome, 2nd Ed.* Autism Asperger Publisher.  
(荒木穂積 (監訳)・森由美子 (訳) (2007) 『壁の向こうへ』 学研)
- 杉山登志郎 (2011) 『発達障害のいま』 講談社
- 竹内謙彰 (2012a) 「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ—青年期後期～成人期の当事者に対するインタビューに基づく分析—」 『日本教育心理学会第54回総会発表論文集』 p.795
- 竹内謙彰 (2012b) 「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ—青年期後期～成人期の子どもを持つ母親に対するインタビューに基づく分析—」 『心理科学』 第33巻第2号, pp.46-63.

#### 付 記

本研究のインタビューに快くご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。本研究は、科学研究費補助金・基盤研究 (C) (課題番号：22530729) 「発達障害当事者とその家族における発達支援ニーズに関する語りの発達心理学的研究」 (研究代表者：竹内謙彰) の助成を得て実施されたものです。なお、本研究のデータの一部は、2012年11月に開催された日本教育心理学会第54回総会にて報告されました (竹内, 2012a)。

## Special Needs of Adolescents and Adults with High-Functioning Autism Spectrum Disorders : An Interview-based Analysis.

TAKEUCHI Yoshiaki \*

**Abstract:** The aim of this study was to clarify what kinds of special needs exist among adolescents and adults with high-functioning autism spectrum disorders (HF-ASD). Seven participants with HF-ASD were interviewed about their special needs. The verbatim records of interview were analyzed using modified grounded theory approach (M-GTA) in order to form concepts based on narratives, construct categories integrating concepts and find out interrelationship among categories. Through the analysis, four categories were constructed: (A) the wish for people to understand the traits of autism spectrum disorders (ASD), (B) needs and difficulties related to school, (C) needs and difficulties concerning finding jobs and working, (D) needs and difficulties in daily life. Category A had interrelationships with all other categories as a common need of people with HF-ASD. The constraint of this study and the necessity of further investigation were also discussed.

**Keywords:** High-functioning Autism Spectrum Disorder, Interview, Special Needs, Qualitative Analysis

---

\*Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University